

自由の声

No. 12 発行 アジア・アフリカと共に歩む会
Published by
Together with Africa and Asia Association(T.A.A.A.)

1996年8月現在の報告と予定

- 6月に2台目の車がベノニとダーバンに到着。
- 8月にケープタウンへ本8,044冊を送付。
- デベトン小学校内に移動図書館のベースとなる建物が建設中。
- 今年中に移動図書館の専門家を南アへ派遣。

目次

ケープタウンの「マシフンデイス」を訪ねて.....	2
作業に参加している人の自己紹介.....	6
皆さんからのおたより.....	7
移動図書館活動の現状.....	8
お知らせ他.....	10



本を読む生徒
ダーバン北西オチマチ小学校

新たな南アのパートナー

ケープタウンの「マシフンディス」を訪ねて

久我 祐子

今年5月11日から17日にかけて、アジア・アフリカと共に歩む会(TAAA)代表の野田さんと共に南アフリカへ視察旅行に出かけた。訪問先は移動図書館車用の中央図書館建設を計画・準備中のMEI(Methodist Education Initiative)と昨年の夏から本を送りはじめた比較的新しい受取側NGOである「マシフンディス」である。このうち、私たちの会が初めて訪問するマシフンディスの方に重点をおいて、活動対象地域やその学校を視察して回った。

西ケープ州のケープタウン近くに事務所をかまえるマシフンディスは、1979年に地域の悪化する教育問題に対応すべく設立された、教育を中心とするNGO(「マシフンディス」とはコサ語で「教育しよう」の意味)で、全国規模の開発支援NGOであるTCOE (Trust for Christian Outreach and Education)の傘下にある一地域組織である。TCOEは、「住民参画型の計画・活動(People's Participatory Planning and Action)」をモットーとし、支援する側が一方的に指示するのではなく、実際にコミュニティー活動に参加しそれによりなんらかの利益を得る住民のリーダーシップに基づいた開発を目指している。マシフンディスもこの開発理念に基づき、学校教育の支援、成人用基礎教育、小規模ビジネスの支援などいずれもコミュニティーに深く根ざした活動を行っている。私たちが送る英語の本は支援対象地域の学校に配布したり成人の識字教育などに使用されている。専従スタッフは約10人。

孤立小屋の大海原

私たち2人が国内線でケープタウン空港に着くと、マシフンディスの代表者であるギョセ氏と

アドミニストレーターのノーマ(女性)が迎えに来てくれていた。でっぴりとしたギョセさんは大声で話し、ジョークをとばしては「ガッハッハ」とお腹を揺らしながら笑うパワフルで豪快な方だ。初対面ながら私はすぐにうちとげることができた。若いころ、政治活動家として国外追放となつてから、アメリカで学位を取ったりそのほかの国で働いた経験を持つこの代表者はものごとを広い視野から論理的に説明する人だ。

ケープタウンには3日間滞在することになったが、最初の2日間は、TAAAが送る英語の本をマシフンディスを通して受け取る学校(小学校4校中・高等学校2校)を訪問して回った。これらの学校は、ランガ、ニャンガ、カエリチャという名のマシフンディスがコミュニティー活動を長年支援している貧しい地域に位置する。訪問の際、マシフンディスのスタッフが運転する車で貧しい地域の中を走っていったが、車から見える居住区の貧困ぶりとその規模の大きさは、ショックなものだった。波状のトタン板で無造作に立てられたシャックと呼ばれる掘立て小屋が所狭しと立ち並ぶのが、大海原のように見渡す限り広がっている。車はゆっくり走り続けるのだが、いつまでたっても大海原は終わらずこれでもか、これでもかと視界に広がっていく電線が見えるところは少ない。「こんな小さな家に7、8人も住んでいるのよ」と、四畳半くらいの壊れそうな家を指さしながらスタッフのブレウェはいう。水道もなくトイレもないような家で、大家族がどうやって生活しているのだろうか。アパルトヘイトが法的に廃止されてから今まで移住の自由のなかった黒人が、生活の向上を求めて地方から都会へと移り住んだり、都会に出稼ぎに来ていた男性が田舎に残っていた

家族を呼ぶ寄せるようになり、結果として、都会にこのような貧困居住区がますます広がっているという。

問題をかかえる学校

訪問先の各学校では、校長先生達と短いミーティングを行い、それぞれが抱える問題点を聞いてみた。先生の数、教科書やその他の本、設備等の不足を訴える学校が多かった。また、就学が遅れたり休学する生徒が多いので、各小学校では約10%の成人生徒を抱えており、卒業後、彼らが就職できるような技術を身につけさせなければならないという難しい問題もある。図書室のある学校では、かならず図書室を見せてもらったが、全体的に明かに本不足で、どの学校でも本棚にはガラーンと空間が広がっている。そんな中で私たちの送った本を見つげると、やはり嬉しくなる。「あなた方が送ってくれた本は良質でとても役立ちます。これからも是非送り続けて下さい。」と訪問する先々で、校長先生や図書館係員が言ってくれた。

これらの学校を訪問して感心したことは、どの学校も放課後や土日は、地域のコミュニティー用に解放されていることだ。コミュニティーみずから、成人用の識字・算数学級や学生用の補修授業などを運行し、学校側は教室等の設備を提供するという仕組みだ。マシフンディスは、このようなコミュニティー活動を何らかの形で

支援している。マシフンディス、コミュニティー、学校の3者は深くまた効果的に関わり合っているようだ。

躍動感あふれる合唱団

先生達が悩みを抱える一方、生徒達は、明るくて元気だ。私たちを見ると、近づいてきたり、手を振ったりと人懐っこくて本当にかわいい。2日目、カエリチャ地域のジョースローボ高校を訪ねたところ、美しい合唱が聞こえてきた。CDかなにかだろろうと思っていると、この学校の合唱団が、私たちの歓迎会の練習をしているのだとのこと。図書館に案内されると、合唱団と先生たちが私たちを待っていた。観客が私たち数人とは本当にもったいないくらい、それはすばらしい歌声を次々とアカペラで披露してくれた。リズムカルな振り付けは、力強い合唱に躍動感を添えている。拍手してもしきれないほど感動的な歌声が終わると、代表の野田さんが日本語で挨拶をし、私がそれを英語で通訳することになった。「こんにちは」耳なれない外国語を聞くと、みな「なんだ。なんだ」と騒ぎ立て、一斉に好奇心いっぱいの表情を私たちの方に向ける。聡明そうな目でじっと私たちを見つめたまま、挨拶の一語一語を熱心に聞いてくれた。

次に訪れたマシヤ高校でもすばらしい合唱団が私たちをもてなしてくれた。この合唱団は地域でも有名で、この学校を訪れ彼らの力強い歌



農園で働く期間は3ヵ月。あとは失業状態。ケークンがセレスに

声に感動したある日本人の団体に招待されて来日したこともあるという。

訪問する先々で、生徒達の力強さや潜在能力あふれるような姿が印象的だった。貧困地域に住む彼らは家に帰ると勉強する環境も整っていないだろうし、読む本など限られているだろう。自分の教科書さえない生徒も多いのだ。なんとか、彼らの潜在能力がすくすくと伸びるような環境を少しでも早く整えていてもらいたい。そして、そのプロセスの中で、私たちの送る本が少しでも役立つならばこんなに嬉しいことはない。彼ら1人1人にとって、「今」が大切だ。

セレスでの移動図書館車プロジェクト

2日目の夕方、ギヨセさんとノーマと一緒に、ケーブタウンから約北東100kmに位置するセレスに向かった。セレスは、ジュースの製造地として有名な農村地域で、ここの工場で製造されるジュース「Ceres」は、国内マーケット用としてだけでなく、日本を含む数多くの外国に輸出されている。その他にじゃがいも工場やたまねぎ工場などがある。山脈風景の美しい地域だが、ここに住む黒人の多くは、工場の季節労働者か白人所有の大農園で働く農地労働者で、いずれも貧しい生活を強いられている。マシフンディスには5つの活動拠点地域があり、それぞれの地域に地域住民の中心的開発ボランティ

アメンバーからなるコミュニティ開発委員会(C.D.C)を設置しているが、ここセレスの黒人タウンシップ「ンドゥリ」もC.D.Cを置く活動拠点の1つである。

私たちは、今年の末頃に移動図書館車をマシフンディスに送ることを約束しているが、マシフンディスは、送られる予定の移動図書館車をここセレスで活用することを計画している。彼らの計画とは、ンドゥリのC.D.Cがセレス市議会の協力を得て移動図書館車プロジェクトを運行していくというもので、C.D.Cがプロジェクトを実際に推進していき、セレス市議会の方は、ガレージや運転手を提供し運行費(ガソリン代や維持費)を負担していく、という内容だ。

セレスに着いたこの日は、泊まったホテルでセレス市役所職員とンドゥリ代表の市会議員のうちと顔合わせの夕食会をし、次の日は早速、移動図書館が巡回する予定の場所に視察に出かけた。

農園地域に移動図書館車が走る日

マシフンディスは、移動図書館車の対象地域として、まずンドゥリと周辺の農園地域を考えている。プロジェクトがある程度定着するようになった段階で、対象地域をカラードの地域など他の地域にも拡大していくつもりだ。



年令より幼く見える16歳の少年。学校に行っていない。「警官になりたい」という。セレスにて。



セレスの農園労働者の子供達。
学校へ行っていない。
「学校へ行きたい人？」
みんな手を上げる。

私たちは最初、タウンシップの中心を訪れケープタウンのタウンシップと同様に貧しい家が広がっているが、ここはトタン板ではなく材木でできている。車から降りてあたりを見回してみると、近くの家の前にプラスチックの大きな樽が置かれてあり、そこに2人のおばさんが立っている。何が入っているのかと聞いてみると、ソルガムを原料とした伝統的なお酒を醸造しているのだという。タウンシップの人たちに売って小銭を稼ぐため、といていた。そこからちょっと離れた家の前に、昼間だというのに若い男性2人が無気力な表情で何もせずに椅子にすわっている。ここはタウンシップの住民の多くは季節労働者で、働ける期間は3カ月しかなく他に仕事を見つけるのはむずかしいと同行した若い市議員の男性は嘆いていた。中心にある小学校と高校を訪ねてみた。移動図書館車が走るようになると、もちろん学校にも巡回するようになる。ケープタウンと同様に設備不足が深刻なようだが、子供達の明るい表情にすくわれる。イングシニング・ゼツ高校では、私たちが訪問した時ちょうど朝会のようなものをやっていた。白人女性のメアリー・スミス校長が、私たちを紹介し移動図書館車がセレスに送られる計画を話すと、生徒達からワアという声と大きな拍手が起こった。

その後、C.D.Cのメンバーとミーティングを行ってから、私たちは、農園地域へと出発した。タウンシップに住む黒人は毎日が貧困との戦いだが、少なくともそこには自分達のコミュニティがあり、なによりも情報にアクセスする機会を持っている。しかし、大農園内に住む農地労働者は、コミュニティを持たずそれぞれ孤立して暮らしている。情報をアクセスする手段もごく限られているし、学校へ行く機会も少ないという。「彼らはとても閉鎖的な世界に生きているのよ。世代から世代へと農園主にいわば隷属していて、外の世界はほとんど知らない。南アフリカが新しく生まれ変わったという実感もあまりないでしょう。情報が閉ざされているのですもの」とノーマは説明する。車は都心を離れどンドン農園地域へと入っていき、ある大農園内の労働者たちが住む場所に停車した。近くにコンクリートでできた納屋のようなものが2、3件並んでいる。農園主が提供する労働者の住居だそうだが、7、8人の子どもたちがいたので、近づいていった。見るからに栄養不足で弱々しく、タウンシップの学校の生徒たちのような泥刺さはない。しかし、好奇心あふれる可愛らしい顔を私たちの方に向けてくれた。同行した市議員のカラードの男性が私たちのこ

本の作業に参加している人の自己紹介

◆マーク・リーダーマン

私の住んでいた町ロンドンの図書館では、読書家を表彰していました。私は、6歳から11歳までの間に、20回以上、金賞をもらいましたが、11歳から20歳までは一つももらえませんでした。その間私は、テレビや勉強や友人に夢中になっていて、本からは遠ざかっていたのです。

その6ヵ月後（私は現在23歳です）、英語の教師として日本へきました。それから2、3週間は、孤独なアパート暮らしと、ひしめきあうラッシュアワーの電車との狭間で忘れかけていた想像の世界を、唯一本だけがアクセスできる世界を、再発見しました。もし本の世界へ逃亡していなかったら、私は相当落ち込んでいたでしょう。

そんな時、張式が中国の文化大革命時代のことを書いた「ワイルド・スワン」を読んで好きなことなら、いつでもどんなことでもできる自分の幸運に気がつきました。

日本にきて数か月が過ぎた頃、仕事をこなし、時々カラオケに行く以外に何か別のことをやりたくなり、ボランティア団体に関して問い合せてみました。TAAAは私にぴったりでした。

南アフリカは多くの問題を抱え、私にはわかりにくいこともありますが、TAAAが取り組んでいることは足が地についていて、現実的です。手応えのある成功をおさめています。

TAAAは、私が経験したことがないような困難な生活を送っている南アフリカの人々に、本という貴重な贈り物で、人々に学ぶ機会を与えている、友好的で、純粋で、無欲な人たちだと思います。（程塚明子 訳）

とを説明した。私たちも彼を通訳に、いくつか質問してみた。「学校に行っている人は？」と質問してみると、バラバラと何人かが手を上げた。「学校に行きたい人は？」これには、みな元気よく手を上げた。しばらくすると、大人達の集団が来た。彼らの親たちなのだろう。やはり、なにか疲れたような弱々しい雰囲気を感じ出している。軽く挨拶をして、私たちはまた車に乗りその場を去った。「ここはそれほど都心から離れていないし、農園主が良心的な人で使用者の子どもたちを学校に通わせているから彼らは比較的ましな生活をしているみたいだ」この地域に詳しい元校長先生の市会議員はい。う。農園地域の奥へ行けばいくほど彼らの生活ぶりは悲惨さを増すという。この閉塞した地域に、移動図書館車が有効に使われて新しい風を運ぶようになっていってほしい。セレスからケープタウンに帰る途中で、周りの絵のように美しい田園風景を複雑な思いで眺めながら、私は強くそう願った。

「虹」を構築する土台作り

今回タウンシップや農園地域などを視察して改めて感じたことは、政治は変わったとはいえ経済的なアパルトヘイトを根絶していくことがいかに難しく時間を要する作業であるかということだ。マンデラ政権は、人種融合による「虹の国」を唱っているが、持続的な「虹」を建築していくには、アパルトヘイト時代の犠牲者たちの教育や生活レベルの向上は、欠かせない土台作りとなるだろう。この意味においても、マシンディスのような地域に根ざし地道な活動をしてきたNGOは、これからますます必要とされるべきなのに、新政権になってからそれまで資金源であった海外援助が政府の方に流れるようになり、多くの実力のあるNGOが資金難に直面している事実はとても残念だ。

「アジア・アフリカと共に歩む会」は、ベノニダーバン、ケープタウンと、資金難に当面しながらも着実な教育活動を続けているNGOとしっ

かり手をつないで本や移動図書館車を送ってきたし、これからも様々な支援を続けていこう。私は以前から、この会を通して、教育という、新生南アフリカの土台を作る根幹的な作業

に、日本から大海の一滴であれ、お手伝いをしていることをとても嬉しく思っていたが、今回の視察旅行でその思いはますます強まった。

〈 遠方から応援して下さる皆さんからのおたより 〉

井関純さんより (舞鶴市)

根っからの本好きで、幼い頃のマンガ本から文学を経て、ドキュメンタリーに読みふけています。昔は、貧しさでなかなか好きな本も買えず、図書館通いに明け暮れました。今は、仕事に追われ、読書にあてる時間が減ってきました。しかし、本を手にして未知の世界に没入できる楽しみは、忘れられず、いつも心の糧としています。

学生時代に聞いたアバルトヘイトと、それに苦しむ南アの黒人たちの状況も、幾冊かの本で知識を増やしたものです。人間として何か力になりたい!と望みながら、はるか地球の裏側へ届くすべなく時を経るばかり。無力感にひたりつつアレコレ情報を探していた時に、貴会の活動を新聞で拝見し、さっそく申し込む。

田舎に住む身のためこれと言ったお手伝いできません。せめて、フトコロの具合を計りながらのささやかな寄付を、続けてゆこうと思います。野田さまはじめ皆さまのご尽力を今後ともお祈り申し上げます。 1996年5月8日

寒川尚周さんより (花巻市)

アジア・アフリカと共に歩む会の活動は無限の彼方にある到達目標を見定めながら、現実には自分達に出来ることを一つ一つ積み重ねていくタイプの活動だと思います。私に出来ることはわずかですが、(わずかであることを必要以上に気にせず)息長く、応援していきたいと思えます。

1996年5月22日

岩田めぐみさんより (品川区)

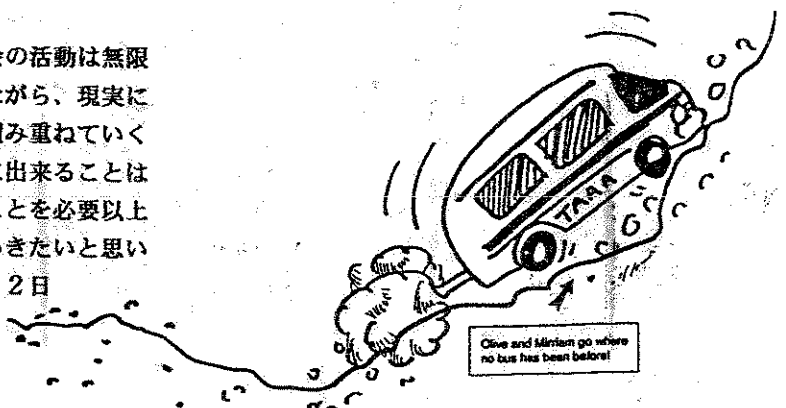
街には花が咲き乱れ、一年のうち最も美しい季節がやって参りました。

初めまして。私は青山学院高等部の3年生の岩田めぐみです。私の学校でそちら様の会に英語の本を送る運動をさせて戴きました折、期限を過ぎてからお送りしたい本が沢山出たので、直接、送らせて戴きます。皆、私達が小さい頃に読んだ本で、色がきれいなものもありますので、再びアジア・アフリカの方々の読む本として教材にして戴けましたら、この本達もきっと喜ぶことでしょう。

今、政府単位で行っている援助協力が問題を起こしている時に、このグループのように、参加する人にも負担にならず、相手方にも大変喜ばれる活動がなされていることは大変すばらしい事ですし、又、うちの学校でできる事が何かありましたらご協力したいと思っておりますので、何か又、新たな運動を起こされる時は、ご一報下さい。

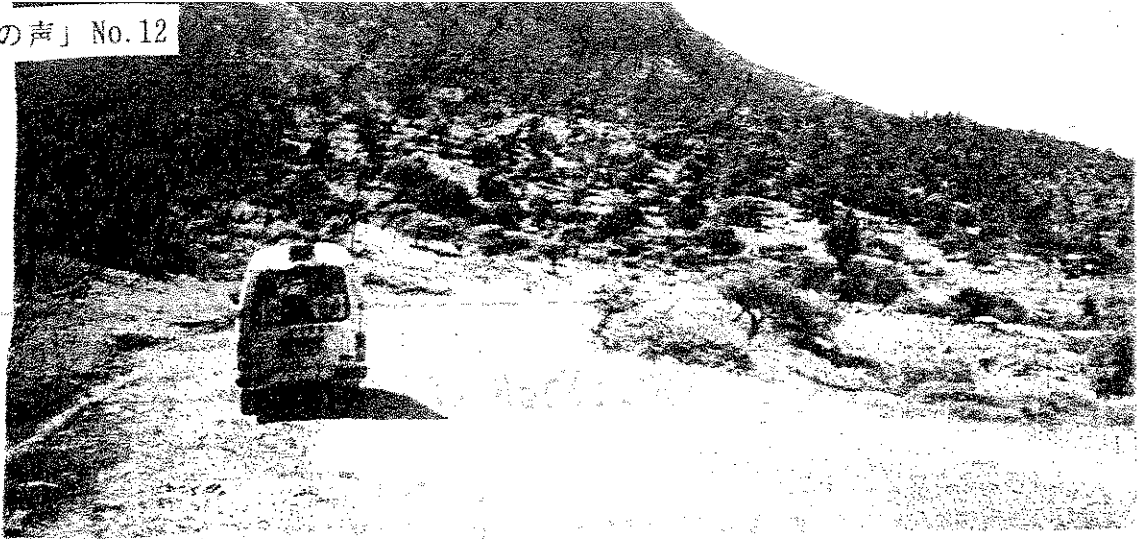
皆々様のご発展とご活躍をお祈りしつつ。

1996年6月1日



ELETの移動図書館のポスターより

(8)



移動図書館活動の現状

野田千香子

ELEET (English Language Educational Trust) では昨年送った小さな中古の移動図書館車が大活躍しています。ダーバンを基地に南北数百kmを重い本とELEETがつくった教材本を積んで走っています。それはあたかも東京を中心としたら浜松や仙台まで足を伸ばしているようなものでしょう。写真にあるように広大な荒野や高原を越えて運びます。時には豪雨直後の泥沼にはまってしまって、皆で押したりひっぱったりということもあります。印刷状態がよくないので不鮮明ですが、写真からご想像いただけるかと思います。

数年前まで埼玉県越谷市で使用していたこの車は小さいのと年数が経っているので、私達はこの5月に埼玉県狭山市で使用していた車を2台目として送りました。2台あれば道路事情が悪く故障が起きても活動はストップしません。ELEETは本を運ぶだけではなく、もともと10年にわたって教師の再教育に取り組んできています。これまでの会報にも報告してきましたが、生徒の積極性や自主性を引き出すようなすばらしい教育法です。私たちの送った本がELEETの活動の中で役立っていくことは、実にうれしいことです。





MEI (Methodist Education Initiative)では、一般犯罪の多発する中で鍵のかかるガレージがないと活動が始まらないという現地の見解から、現在、書庫付きガレージをデベトン小学校内に建設中です。この図書館車ベースセンターは9割を昨年度の郵政省ボランティア貯金から残りを会の資金から支払いました。小学校内に建設許可がとれるのに期間がかかったため6月にやっと建設契約にこぎつけ、目下地元のRンドロブ建設会社が建設中です。完成後の11月か12月に、埼玉県立浦和図書館司書で移動図書館担当だった古我さんが指導と視察と協議のためにMEIを訪れます。

マシフンデイスには今年中に1台か2台、送る予定で準備中です。

もう一つこれからの活動予定として考えていることは、MEIとELETのスタッフを日本に招くことです。会や一般の人たちとの交流の他に、埼玉県立熊谷図書館に移動図書館活動の研修をさせてもらうことをお願いしてあります。年末か1月頃にぜひ実現させたいと考えています。

